

# 日本災害情報学会「廣井賞」

(廣井賞表彰審査委員会幹事 天野 篤)

■ 2009年廣井賞授賞式・受賞記念講演：2009年10月25日 静岡県地震防災センター

## 1. 2009年廣井賞



### ■社会的功績分野

1) 「ビジュアル版幸せ運ぼう」制作委員会 (神戸市、神戸市教育委員会、神戸大学、読売新聞大阪本社、読売テレビ放送)

阪神・淡路大震災の報道映像や記事を用いたビジュアルな防災教材を制作し、全国に配布した。震災体験を後々に語り継ぎ風化させないため、大変役立つものと期待されている。

2) マスメディアと研究者のための地震災害に関する懇話会 (Network for Saving Lives)

災害時に地域住民への適切な情報発信を目指し、在名の報道、研究、防災行政担当者らが集い、定期的な勉強会などを通じて災害情報への理解を深め、効果をあげている。

### ■学術的功績分野

3) 静岡大学防災総合センター 牛山素行 准教授

災害情報を用いた風水害の被害軽減に関する実証的な研究に一貫して取り組み、独自の視点から数多くの秀逸な学術業績をあげている。

## 2. 授賞式

### 1) 阿部勝征会長挨拶

本日、第3回廣井賞の授賞式が催されることになりました。3年前、故廣井脩前会長の遺志を継ぐかたちで何とか後に残すものはないかと、災害情報に関する賞を設けました。学会としては、この廣井賞というものを大変栄誉なことと思っています。

### 2) 藤吉洋一郎委員長挨拶

今年は沢山の推薦をいただき、表彰を選ぶ作業は苦勞しました。学会の特徴として、社会貢献と言いますか、災害防止、被害軽減に役立つような活動、研究、そういったニュアンスのものになります。「そのようなものならここにもあるよ」という推薦が多かったと思います。

『「ビジュアル版幸せ運ぼう」制作委員会』は、阪神・淡路大震災の経験を風化させない、その後生まれてきた子どもたちは被災地に居ても震災を知らないわけですが、ちゃんと経験を伝えていくために、報道で使われた映像や記事をもとに教材を作られました。それを全国の学校で子どもたちの教育に役立て、未来につながる活動を続けられています。

「マスメディアと研究者のための地震災害に関する懇話会」は、名古屋圏の研究者、行政などの皆さんの集まりで、同じような勉強会は各地にあります。なぜこの方々なのかと言いますと、単に研鑽を積むだけではなく、皆さんの結束や連携が、新時代の情報伝達システム、共通の情報基盤といったようなものをつくっていく力となり、発展性があるということで大いに期待をしました。

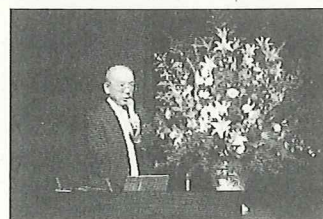
学術的功績分野は、今回、大会実行副委員長を務めていただいた、静岡大学の牛山素行先生を表彰しました。

## 3. 受賞記念講演

### 1) 「ビジュアル版幸せ運ぼう」制作委員会

神戸市保健福祉局長 桜井誠一氏

廣井先生との出合いを少しお話しします。15年前の阪神・淡路大震災の後、情報伝達や広報の方法、そして広報結果を検証しようということになりました。廣井先生にもご協力いただき、結果を『防災都市神戸の情報網整備』という本にまとめました。先生と専門家との対談の中で、今後の災害情報のあり方をご教授いただきました。また今般、新型インフルエンザでいろいろ悩みました。風評被害という話が出たとき、先生の『流言とデマの社会学』という本を引っ張り出し、風評被害の定義などを勉強しながら対応にあたりました。本当に先生にはお世話になり、その栄誉ある賞をいただけて喜んでます。



さて、防災教育教材「ビジュアル版幸せ運ぼうが育むもの」と題して説明します。映像を観ていただけるとリアルに当時のことがわかります。震災を知らない子どもたち、そして多くの方々に伝えるのに、本当に映像には力、すごく訴える力があると思っています。

私たちは、神戸の防災教育をどうしていくか、震災のあと、ずいぶん悩み、取り組んできました。真っ先に取り組みを始めたのが神戸市教育委員会です。平成7年に子どもたちのために副読本を作成し、その教材を使って教育を進めました。知識とか体験、そして技術、命、絆

という視点から減災教育を中心にやろうと考えました。また、学校を中心とした地域と共に学ぶという取り組みを進めていました。

一方、神戸大学の経営委員会に、神戸市長の矢田立郎と読売新聞社取締役の河内編集局長（当時）がおり、震災10年のときに神戸として何か残していかなければならない、大学を中心に何かやりましょうという話が出て、テーマとなったのがやはり「風化」でした。風化をどう防いでいか、神戸大学と読売新聞社、読売テレビ放送、神戸市の4者が一緒にやっていると決まったわけです。

そして平成7年の副読本をもとに、18年から19年にかけて中学校用のDVD、続いて小学校用、今回の全国版。これは神戸だけではなく、いろいろな災害を取り込んで、震災を知らない方々が学び、教えられる教材として制作しました。教材と指導案を基本に、当時の映像、新聞記事、そういう客観的事実に基づく資料とがセットで教材化されています。さらに、いろいろな災害への対応を直接体験した教員や記者などの専門家にご執筆いただきました。また、誰もが教え学べるカリキュラムとして指導案があり、ここには教える視点、子どもたちへの問いかけのメニューが入っています。

この取り組みは全国的に広がり、地域、学校での学習以外に、教員の研修、語り部の派遣、そして自治体や企業の危機管理研修でも本教材が活用されるようになりました。皆さんの評価という点では、例えば「防災、命、人間関係について児童に考えさせることができた」という教材を使用した教師の声。仙台市のNPOの方からは「宮城地震に対し学び、考え、行動する一助になりました」。教材で学んだ子どもたちは「校庭の仮設で学ぶ当時の子どもたちの姿にジンときた」。海外でもこの教材の映像を見せた授業が始められていて「助け合う大切さを学んだ」という嬉しい声が聞こえています。

私たち自身も、この教材を制作して学びました。まさしく体験を語り続けることの大切さ。さまざまな教訓をもとに、新たな知恵を生むことの大切さ。さらには、地域の一人一人とともに学習をして、地域の力をつけていくことの大切さ。このほかにもたくさん私たちが得たものがありますが、この三つを皆さま方にお伝えをして、私のご報告に代えさせていただきたいと思えます。本当に有難うございました。

## 2) 「Network for Saving Lives」マスメディアと研究者のための地震災害に関する懇話会

名古屋大学大学院環境学専攻教授 福和伸夫氏

今回は廣井賞をいただき、本当に有難うございます。廣井先生が目指されたことを、地域でしていたことでもあり、賞をいただけたことは大変光



栄です。

懇話会とは何かを一番わかりやすく説明しているのは、英語名称「Network for Saving Lives」です。組織や個人のためではなく、地域の皆の命を守るため、今できることを立場や専門を超えて一緒に考えるNetworkです。

NSLできたきっかけは、2000年冬の深夜、3人の若い大学人の中での愚痴メールです。3人は地震学の山岡耕春先生、活断層の鈴木康弘先生、それに建築屋の私です。「もうすぐ1月がやってくる。今年もまた沢山の取材がありそう。毎回同じことを聞かれ、毎回同じことをしゃべる。人は変わるけれど中身は毎年変わらない。取材拒否しようか」などと冗談交じりでチェーンメールをしていました。このままでは悪循環だし生産的ではないので前向きに勉強会をやろうと相談し、3人で手分けして、今までにお会いしたメディアの方々に声をかけ、2001年4月6日に初の勉強会をしました。ちょうど同じ4月に名古屋大学に文理連携型の環境学専攻科ができて安藤雅孝先生が着任され、南海トラフでの地震について意識が高まっていました。

1回目の勉強会は大成功で、みんな熱い想いを語りました。懇話会の場で、当時NHK名古屋に居た隈本邦彦さんが大演説を始め、これは素晴らしい会である、将来みんなの命を救うための会にしなくちゃいけない。そこで付けられた名前が「NAGOYA Network for Saving Lives」で、最初はNNSLと言っていました。基本的な規約として、手弁当であること、オフレコであること、月1回程度、平日の夜、メディアの人たちが来れる時間に開くこと、を決めました。もう一つ、いずれメディアの人たちが主催して社会を変えるイベントをやりましょうとも約束しました。最後の約束だけは残念ながらまだ達成できていませんので、廣井賞は少し早かったかもしれません。

従来は記者クラブ的な行政とメディアとの対峙関係の中に大学人がクッション役として入り、大学や行政が持っている情報をメディアを通して市民に伝えることを意図しています。特徴は、メディア・行政・大学人の信頼関係に基づいていて、メディアの競争の外側でやる、オフレコ、そして何より大事なことは、参加者全員が防災に対する非常に熱い意識を持っていることです。活動を始めてから名古屋での防災関係記事が格段に増え、一定の成果があったと考えています。記事や番組の質も極めて高く、地域防災にとって素晴らしい成果と考えています。

地方での共通課題は、専門家の少なさです。このため首都圏とは違うモデルが必要で、メディアの役割が非常に重要になります。家庭での防災行動を誘導するには、家庭の構成員が関わる学校や地域や職場を変えていくしかありません。ここに居るキーマンを育てるためにも、専門家との間をつなぐメディアの役割が大事になります。その一つがマスメディアであり、これを後押しするのがNSLになっています。背景には「恐るべし名古屋」とネーミングされた活動があります。地域の複数

の有志が、個々の実践活動を始め、それぞれが力をつけ、地域ぐるみの協働の大事さを主張し、ネットワークが形成され、「恐るべし名古屋」という活動ができました。その中心的な役割の一つをNSLが担っています。

活動が長続きした秘訣は、大学が事務局役を宣言せず応援役に徹したこと、主役はマスコミの方々であったこと、組織を離れた立場でやる気のある個人の自由参加の場としたこと、神戸のトラウマと現状に対する危機感を持ったキーパーソンがたくさんいたこと、科学的興味を主とせず地域減災のための勉強の場に徹したこと、あまり頑張りすぎずうまくいかなくと皆で悩みを共有したこと、参加者ニーズを大事にしたUser Orientedな活動であったこと、基礎と先端、普遍的なテーマと時宜を得たテーマのバランスをうまくとれたこと、そして、研究会、一日勉強会、夏合宿の3つを組み合わせることで参加者のニーズをくみ取ることができたこと、オフレコ・再取材という基本条件が徹底され人間関係が維持されたこと、さらに、たくさんある減災活動の中の1つの役割を担ったにすぎなかったこと、などにあると思います。

参加者の数は、600人程度です。9年間で66回の研究会と、4回の合宿、5回の1日勉強会をしています。毎回40人程度の参加です。2004年9月の夏合宿では、三重県南部の一つ一つの町をバスで訪ねました。60年前の東南海地震の体験談や各地の防災対策の現状をあちこちで聴き取り名古屋に帰った翌日、東海道沖地震が発生しました。メディアの人たちや津波研究者は、再度三重に出かけることになりました。勉強をしたのこともあり、各社は素晴らしい報道番組・記事を作りました。画面に登場していた人たちも昨日会った人たちばかりでした。

こういった活動の成果は、愛知県の地震保険加入率の高さや、公共建物や公立小中学校・住宅の耐震補強率の高さに明瞭に表れています。自主的な活動ですが、地域減災のために非常に役に立っていると多くの関係者が話をしています。また、他地域からも多くの参加者があり、NSLと同様の会が各地で生まれています。懇話会が10年近く継続できてきたのは、誰が主役でもなく、皆がそれぞれNSLを通して成長しようとし、それが地域の減災活動へとつながったということだと思います。今回の受賞で、さらに会が長続きできるように思います。どうぞご清聴有難うございました。

### 3) 災害情報を研究する

静岡大学防災総合センター准教授 牛山素行氏

このたびは廣井賞という偉大な先生の名前を冠した賞をいただき、本当に心から感謝するとともに、重大な責任を負ったなと思っています。



さて、私の趣味は鉄道、専門分野は廃線です。何でそ

んな話から始めるかという、私の世代だとNIFTY SERVEという名前を覚えている人も多いと思いますが、パソコン通信の上に趣味の電子会議室というのがありました。私は「鉄道フォーラム」におり、そこで非常に初期のネットワークコミュニケーションを体験しました。実物で廃線が好きだという人間には会ったことがない。ところがネット上にはそういう人がごろごろいる。どんなマイナーな専門分野でも、どこかには同好者がいるのだということに感動を覚えました。見ず知らずの他人同士が都合のいい時間にネットアクセスして情報交換ができるなんてすごえと思ったわけです。電子会議室の運営にもかわり、例えば多量のごみ情報の処理とか、けんかの仲裁といった経験もしました。そういうネットワークコミュニケーションというのを、二十数年前に体験してしまった。そしてそれがどれだけ大変なことか身をもってわかったので、今でも「双方向情報通信なんか」というのには懐疑的、否定的です。

当初ネットというのは遊びだったのですが、ちょっと野心が出て、不特定多数間の情報交換が簡単にできるのは、もしかすると災害時に使えるんじゃないかと考えました。ただ、それはだいたい先だろうなど。けれども当時「パソコン通信による双方向災害情報利用に関する提言」の論文を書いたのです。NIFTY SERVEには台風が接近すると臨時の会議室ができ、そこでいろいろな発言が出て、情報交換がある程度なされたのです。その発言傾向の分析などをしたものです。最初論文を書いたときはおっかなびっくりだったのですが、首尾よく査読を通して、これはもしかすると災害と情報って研究になるのではないかと、仕事になるのではないかと問い始めたわけです。

当時いろいろな本をあたりました。廣井脩先生の『災害情報論』、もう少し古い時代の東大新聞研から出ていた『災害と人間行動』。こういう凶書に巡り会って、いろいろな感動を覚えました。将来、この先生と直接会う機会があるとは想像もしていなかったのですが、先人たちがいろいろなことをやっているのを知り、やっていく価値があるのではないかと気がしました。

あとは皆さんご承知のように、1990年代後半から災害情報の時代が来たといっているような感じがします。ソフト防災が重視されてきて、リアルタイムなんとかとか双方向情報通信なんとかとか。災害情報学会ができたのも1999年です。災害情報というものが、本当に研究になってきたのです。

そのころ何をやったかという、インターネットやドコモのiモードを使い、リアルタイムで雨量観測情報を公開できるシステムを作ったのが99年の6月か7月でした。気象庁みたいなことが自分でできる。システムができたとき、本当に感動を覚えました。その頃の気象庁は、ホームページに気象データなんかあるわけない、という時代でしたが、やがてたくさんのリアルタイムデータが